

主 題：教会とは：大切な戒めに生きる

聖書箇所：マルコの福音書 12章28－34節

【教会に欠かせない四つの柱】

マルコの福音書12：28－34節を開いてください。私たちは2週にわたり教会とは何なのか、教会の働きに欠かせない四つの柱となる真理を、いろいろなみことばを通して考えてきました。これまでの内容を覚えているでしょうか。一つ目の柱は、「教会は主の栄光のために生きていく」ということでした。先週見た二つ目の柱は、「教会は福音に生きていく」ということでした。きょうはその続き、三つ目の柱を見ていきたいと思いますが、その前に一つ質問があります。聖書の中で最もたいせつな戒め、一番重要な命令とは何でしょうか？聖書を一度でも読んだことのある人ならよくわかると思います。この本の中には旧約聖書から始まり新約聖書に至るまで数百、数千もの命令が記されています。「～しなさい」という肯定的な戒めもあれば、「～してはいけません」という否定的な戒めもあります。実際、聖書の最初の五つの本、モーセ五書の中だけを考えたとしてもいくつの命令があると思いますか？その数、実に613でした。果たしてこのような多岐にわたるさまざまな命令が含まれるこの本の中で、一番重要なものとはいったい何なのでしょう。そして皆さん、それらすべての中で最もたいせつな一つの命令があるのだとしたら、私たちはどれほどそれに、日々心を留めているでしょうか。考えてみてください。私たちも普段の暮らしの中で、いろいろなルールに出くわします。仕事場や学校、家庭にあっていろいろな基準や責任があります。知らない人から言われるなら聞き流してしまうようなことでも、自分が尊敬している人や自分が愛している人が訴えるようなものなら、その人を悲しませたくない思いから喜んで耳を傾けようとするでしょう。特に親子間や夫婦間において、絶対に譲れない基準や最もたいせつなルールはこれだと言われるものがあるなら、それには細心の注意を払うでしょう。そうでないと大変なことになります。

今回私たちが見ていくみことばは、最初にも言いましたが、マルコ12：28－34です。もう多くの方がお気づきかと思いますが、この箇所にはイエス様のことばで聖書の中で一番たいせつな戒めが何なのか、その答えがはっきりと記されていました。私たちにとって何よりも愛すべき主ご自身が、聖書全体に出てくる何百何千もの命令の中で、最も重要な一つの命令が何なのかを教えていたわけです。だとするなら、ひとりひとりに問われていることがあります。果たして、イエス様が教えている最もたいせつな戒めがどのようなものなのかを、そもそも知っているでしょうか。そして知っているというのであれば、それにどれだけ細心の注意を払いながら日々を歩んでいるでしょうか。

この朝は教会の三つ目の柱となる真理、「大切な戒めに生きていく」ということをシンプルに大きく二つの要素から学びたいと思います。ぜひ今の問いを自分自身に問いかけながら、みことばによって自分の歩みを吟味してみてください。ではいつものとおり聖書箇所をお読みします。それぞれ神様のことばによく耳を傾けてみてください。

マルコ12：28－34

「：28 律法学者がひとり来て、その議論を聞いてたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、イエスに尋ねた。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」：29 イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。：30 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』：31 次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」：32 そこで、この律法学者は、イエスに言った。「先生。そのとおりです。『主は唯一であって、そのほか

に、主はない』と言われたのは、まさにそのとおりです。:33 また『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する』ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。」:34 イエスは、彼がかしこい返事をしたのを見て、言われた。「あなたは神の国から遠くない。」それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者がなかった。」

○三つ目の柱：大切な戒めに生きるとは

1. 神様を心から愛すること 28-30節

たいせつな戒めに生きていく、その一つ目の要素から一緒に考えましょう。まず第一に、神様を心から愛することでした。もう一度みことばを見てください。この箇所にはイエス様が出くわしたある日の一場面がはじめに書かれていました。「:28 律法学者がひとり来て、その議論を聞いてたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、イエスに尋ねた。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」と。この部分だけをサッと読むのであれば別に何も思わないかもしれませんが、少し立ち止まって考えてみてください。いったいどうしてこの律法学者は突然、どの命令が最も重要なのかを尋ねたのでしょうか。たまたまこの時、頭に思い浮かんだのでしょうか。それとも単なる興味本位で尋ねたのでしょうか。いいえ、そうではありません。この問いの背後には大きな意図が隠されていました。

●文脈

そのことを理解するには、みことばを勝手に切り離して理解するのではなく、文脈を抑えて読むことがたいせつですので、みことばを少しさかのぼって11章を見てください。11章から続いている一連の出来事というのは、イエス様が十字架にかかる直前の最後の一週間に起きたことでした。月曜日にエルサレムに凱旋されたイエス様は、同じ週の金曜日に罪人の身代わりとなって死ぬことになるわけです。律法学者と会話されているこの場面は、その週のちょうど真ん中の水曜日に起きたことでした。この背景を踏まえた上で注目してほしいのが、11:15-17節です。そこにはこの日の前日火曜日に起こったことが記されていました。「:15 それから、彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、宮の中で売り買いしている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、:16 また宮を通り抜けて器具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった。:17 そして、彼らに教えて言われた。「『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巢にしたのです。」と。律法学者がやって来る前日、イエス様がエルサレムの町でなされていたことは何でしたか。それは主の宮をきよめることでした。覚えていますか？これを行なったのは今回が初めてのことでありません。以前、ヨハネの福音書2章を学んだ時にも見ましたけれども、イエス様は働きを始められた最初の週にも同じようにして宮の中をきよめていました。本来であれば礼拝の中心、祈りの中心であるはずの場所が、商売の場へと変わり果てた様子をご覧になった主は、細縄で作った鞭をもって、そこにいた羊や牛、また商売していた者たちをみんな、そこから追い出されたわけです。しかし残念ながら、それから3年経った後も状況は変わっていませんでした。働きの最後の週に訪れた主の宮は、墮落した元の状態に戻っていました。だからこそその様子をご覧になった主は、再びそこにいたものをすべて追い出されたわけです。

さて、そんなイエス様の行動を目にした者たちは、当然みなが諸手を挙げて喜びはしませんでした。むしろひどい憎しみを抱いた者たちがいました。それこそが主の宮の管理を含め、当時の宗教を牛耳っていたユダヤ人指導者たちでした。特にひとりの大祭司とパリサイ人やサドカイ人から選ばれた70人のメンバーで構成されていたユダヤの司法機関サンヘドリンは、イエス様のことを最初から激しく目の敵にし続けてきました。自分たちの教えを人々の前で偽善的だと非難され、自分たちが独占してきた力や民からの賞賛というものを奪われ、自分たちの懐を肥やしていたその商売を二度も荒らされた彼らのうちには怒りや妬み、そういったものが積もりに積もっていたわけです。彼らはなんとかしてイエス様を殺そうとしました。たいへんな人気を集めていたイエス様の評判を、どうにかして地に落として、口

ローマに逆らう者として仕立て上げ、処刑するのに十分な何かしらの欠点を見出そうとしたわけです。そんな彼らがとった行動は何だったと思いますか？それがイエス様に質問することでした。彼らは質問を通して、イエス様を罠にかけて捕えるための口実を生み出そうとしたわけです。

その時の様子が12：13のところから記されています。「さて、彼らは、イエスに何か言わせて、わなに陥れようとして、パリサイ人とヘロデ党の者数人をイエスのところに送った。」と。この後のことを今は詳しく見ません。それぞれで読んでください。最初に送られてきたパリサイ人たちは、イエス様にカイザルに税金を収めることが律法にかなっていることなのか、かなっていないことなのかを尋ねました。何のために？もし「かなっている」と答えれば、ローマに苦しめられていた民衆からの人気を失うことになり、もし「かなっていない」と答えれば、ローマに逆らう反逆者として訴えることができました。しかしイエス様はそんな罠にひっかからなかったわけです。一度目は失敗しましたが諦めません。その次に送られてきたサドカイ人たちは、今度はイエス様に復活に関することを尋ねました。しかしその罠も失敗に終わりました。イエス様はそれにも引っかかりませんでした。どちらの質問も見事に目的を果たすことはなりません。それでも諦めきれなかったサンヘドリンが最後に送ってきた人物こそが、この28節に登場する律法学者だったわけです。おそらく彼自身もイエス様に対して関心を持っていたでしょう。しかし彼は独自でやって来たものではありません。サンヘドリンが代表として送った最高の律法の専門家でした。

並行箇所となるマタイの福音書22章を見てもこのように書いています。マタイ22：34-35
「34しかし、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、一緒に集まった。35そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスを試そうとして、尋ねた。」と。ひとりの律法学者が尋ねていたことは決して突拍子もないものではありませんでした。この質問の背後にはイエス様を激しく憎んでいる者たちの巧みな策略というものが存在していました。すべての命令の中でどれが一番たいせつですかという問いには、イエス様を殺したいと願う者たちがともに集って、考えに考え出した最後の罠だったわけです。彼らは何よりもイエス様の口から、処刑するのに十分なことば、当時の人々を幻滅させ、到底受け入れられないようなことばが出てくることを強く願いました。まさか、まさか自分たちもよく知って、ずっと信じてきているようなことばが出てくるとは夢にも思っていなかったでしょう。

この文脈を覚えた上で、きょうの箇所に戻っていただくと、律法学者の質問に対してイエス様はどのように答えられていましたか。「29イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。30心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』」と。だれよりも偉大な教師であったイエス様は、ここで申命記6：4-5を引用して答えていました。この箇所はユダヤ人であれば毎日少なくとも朝と夕には暗唱しているようなシエマと呼ばれるものでした。つまり、質問した宗教家たちにとっては最も親しみのある箇所の一つだったわけです。おもしろいのは、やって来た律法学者もそのことを素直に認めていました。32節「そこで、この律法学者は、イエスに言った。「先生。そのとおりです。『主は唯一であって、そのほかに、主はない』と言われたのは、まさにそのとおりです。」と。イエス様の答えは、だれをも納得させるような最高の答えでした。神様を心から愛すること、これこそがすべての人にとって最も根幹の、どんなに正しいことば、行為や儀式にまさる一番たいせつな戒めだったわけです。

だとすると、どうでしょう。律法学者も認めるような最もたいせつな戒めがどのようなものかを、私たちは本当にわかっているのでしょうか。立ち止まって改めて考えてみてください。最も重要な命令は、私たちが好き勝手な方法で神様を愛するようには全く言っていませんでした。四つのことばがここに重ねて使われていました。「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」と。「心」とは何でしょう。「心」というのはその人自身のことです。私たちの考えや意思、感情、行動などのすべてを生み出す源のことです。「思い」とは何でしょう。「思い」は心と非常

によく似ています。何かをしようとする時に働く内側の意思や感情のことです。「知性」とは何でしょう。「知性」というのはその人の知的な部分で、私たちの知性、考え、理解のことです。「力」とは何でしょう。「力」とは私たちのからだのことです。

この四つのことばが何を訴えているのでしょうか。覚えていてください。ここではそれぞれの細かな違いに注目しなさいという話ではありません。それ以上に、みことばが、神様が求めていることは、私たちがただ私たちのすべてを尽くして主を心から愛することでした。気持ちや感情だけではないということです。行動だけでもないということです。内側も外側もどちらもたいせつでした。私たちは意思においても、感情においても、知性においても、行動においても、そのすべてを尽くして、ただ神様に仕えて神様を何よりも愛そうとするようにと言われていたわけです。

私たちに与えられている時間も、私たちに与えられている持ち物も、私たちに与えられているこのからだもすべてを用いて、愛する神様の栄光のために喜んでささげていくということが問われていたわけです。そして、その時に絶対に欠かせないことがあります。何かわかりますか？それは自分自身の愛する主の姿を忘れないということです。私たちが心から神様を本当に愛していきたいと願うのであれば、絶対に欠かせないのは、私たちの愛する主の姿を忘れないということです。申命記のことばも、その箇所を引用したイエス様のことばも同じです。あなたの神である主を愛せよという命令を与える前に、どちらも主の姿を思い出させていました。もともとの申命記の方を見ても、6：4は「聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。」ということばで始まっていました。そしてその方を心から愛しなさいと。

以前、詩篇を学んでいた時に、聖書の中で太文字で出てくる「【主】」は、神様の個人的な名前である“ヤハウェ”を表していると学びました。この名前が何を意味するのか、私たちには完全に理解することはできません。少なくともヤハウェであるこの神様は、昨日も今日も明日も決して変わることはない永遠の神様であり、自分以外の何者にも頼る必要のない自存の神様でした。限界のある私たち人間とは異なって、この方はだれかの助けを必要とすることなどありません。だれかの知恵を借りる必要もなければ、だれかの力や支えを必要とする必要もありません。この方こそ、ただご自分の力のみでこの世界のすべてを造られた全知全能の造り主、今もすべてを支配されている主権者、ほかの何かをいっさい必要としない、力と富に富んだ主ヤハウェでした。そしてすごいのは、そんな主が遠く離れた存在なのではありません。そんな主が私たちの神でした。キリストにあって恵みによって救われた者にとって、この主は自分とともにいてくださる神です。大きな喜びではありませんか。この事実が苦難の中にいる信仰者たちにとって、いつも励ましや慰め、力をもたらして続けてきたものでした。たとえば詩篇の中を見ても、こんなことばが繰り返されています。詩篇3：5-6にこのように記されていました。「：5 私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。【主】が支えてくださるから。：6 私を取り囲んでいる幾万の民をも私は恐れない。」と。詩篇23：1もこう書いていました。「【主】は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。」と。詩篇118：6-9にもこのように書いていました。「：6 【主】は私の味方。私は恐れない。人は、私に何ができよう。：7 【主】は、私を助けてくださる私の味方。私は、私を憎む者をもものとしません。：8 【主】に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。：9 【主】に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい。」と。この偉大で憐れみ深い主の姿を覚えるその時、主のご性質や主のなさったみわざに心を留めるその時に、私たちがとれる最も自然な応答は、自分とともにいてくださる主を、心から愛するということになるわけです。ほかのものを置いて自分とともにいてくださる神様を、私たちのような罪人を愛して御子を与えてくださった方の愛を感謝しながら、私たちのすべてを尽くしてどんな時も心から主を愛そうとするわけです。

立ち止まって考えてください。果たして普段の歩みの中において、私たちは最もたいせつな戒めにどれほど焦点を置いているのでしょうか。私たちが抱く神様に対する愛というのは、みことばが示している主

の姿に動機づけられたものでしょうか。ただ内側の感情だけじゃなくて、喜んで従うという神様への従順を伴った愛でしょうか。当時の律法学者たちの問題は、まさにここにありました。彼らは確かに外側だけを見れば、正しくふるまっていました。だれよりも一番に奉仕するような、周りの人から称賛を集めるような行いを熱心になしていました。しかし彼らには最も肝心なことが欠けていたわけです。何ですか。彼らの愛は神様に向かってささげる心からのものではなくなくなってしまっていたということです。どうでしょう。私たち自身の愛は心からのものでしょうか。悲しいことに、ここにいるだれも完璧に神様を愛しているような人はいません。しかし私たちはみな、このたいせつな戒めが求めているように神様を心から愛する者として成長し続けていく必要があります。どんなものよりも神様に従うことを選んで、どんな時も心を尽くして、思いを尽くして、知性を尽くして、力を尽くして、ただ神様を愛する者として歩んで行くわけです。これを聞いてある人は思うかもしれません。そのような者としてますます成長していきたいけれど、どうしたらいつも変わらずに神様を心から愛せるのでしょうかと。もしそのように思う人がいるなら、自分の普段の生活を振り返ってみてください。その中で私たちが神様を忘れてしまっているような場面はいったいどのような時でしょう。どんな時に私たちは神様を心から忘れていましょう。いろいろな場面が思い浮かぶかもしれません。おもしろいのは、みことばも私たちが神様を忘れてしまう危険性があることを何度も何度も注意していました。また特に、今回私たちが学んでいるこのたいせつな戒めが記されていた申命記を見てみると、そこにはその警告が繰り返されていました。心を尽くしてあなたの神、主を愛しなさいという戒めを与えた後、その心から人が神様を忘れてしまう場面があるのだということをいくつも具体的に描いてくれたわけです。

ですから申命記6章を開いてください。全部は見られませんが、今から2カ箇所を読みますので、皆さん自身が答えを考えてください。質問は、何が原因で人は神様を忘れてしまうと言われているかです。1カ箇所目は申命記6：10－12にこのように書かれています。「：10 あなたの神、【主】が、あなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地にあなたを導き入れ、あなたが建てなかった、大きくて、すばらしい町々、：11 あなたが満たさなかった、すべての良い物が満ちた家々、あなたが掘らなかった掘り井戸、あなたが植えなかったぶどう畑とオリーブ畑、これらをあなたに与え、あなたが食べて、満ち足りるとき、：12 あなたは気をつけて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出された【主】を忘れないようにしなさい。」と。2カ所目は申命記8：14－18を見ていただくと、「：14 あなたの心が高ぶり、あなたの神、【主】を忘れる、そういうことがないように。——主は、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出し、：15 燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ、堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ、：16 あなたの先祖たちの知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせられた。それは、あなたを苦しめ、あなたを試み、ついには、あなたをしあわせにするためであった——：17 あなたは心のうちで、「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ」と言わないように気をつけなさい。：18 あなたの神、【主】を心に据えなさい。」と。

いったい私たちは何によって神様を心から忘れてしまうのでしょうか。それは私たちの高慢さ、プライドでした。私たちが振り返ってみるときに、神様がすべてのことをなしてきてくださったのに、自分が何か成し遂げたことがあるかのように、手柄のように誇るのであれば、神様が今もすべてを与えてくださっているにもかかわらず、自分の力で、それを手にしているのだと思い込んで誇るのであれば、私たちはその時、神様を心から忘れてしまいます。言い換えると私たちはそのような時、心から神様を愛していないということです。私たちが誇っているのであれば、私たちが自分の手で、自分の力で自分の知恵で何かしら自分に値すると思っているのであれば、その時私たちは神様を心から愛することなどできないということです。だからこそ私たちが神様を愛する者として成長したいと願うのであれば、どんな時も神様の恵みに心を留め続けることでした。みことばを通して、どんな時も自分の罪深さを覚えて、自分の弱さや自分の足りなさを覚えて、そんな私たちに与えてくださる神様の恵みを、私たちの弱さの

うちに働いてくださる神様の力とあわれみに抛り頼み続けることです。心から神様を愛する者というのは、同時に心から神様の前にへりくだっている者でした。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして神である主を愛すること、それこそが信仰者にとって最もたいせつな一つの戒めでした。ではこれで聖書を閉じて、きょうの話はおしまいです、とはなりません。すべての命令の中でどれが一番たいせつですかと尋ねた律法学者も、最初の答えを聞いた時点で会話は終わったと思ったかもしれませんが。しかし驚くことにイエス様のことは、まだ続いていました。つまりイエス様にとって、一つ目に挙げたものと次に挙げる二つ目のものは、別々のものではないということです。これらは二つで一つのたいせつな戒めでした。最も重要な一つの命令というのは二つのものから成り立っていたわけです。

2. 隣人を自分自身のように愛すること 31節

ではいったい神様を心から愛することと対をなすもう一つの命令とは何でしょう。みことばに戻ってください。続けてイエス様はこう言われていました。31節「次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」と。イエス様はここでレビ記19:18を引用されました。もう一つのたいせつな戒めに関して何とされていますか。たいせつな戒めに生きるということは、神様を心から愛することであり、そして隣人を自分自身のように愛することでした。それが二つ目の要素だったわけです。隣人を自分自身のように愛することでした。神様への愛というのは必然的にほかの人への愛も生み出すものでした。神様を心から愛することと、隣人を愛することとは決して切り離すことなどできない聖書の中で最も重要な一つの命令だったわけです。

これと同じ真理は、別の箇所でもはっきりと言われていました。たとえばIヨハネを見ても繰り返されています。Iヨハネ2:9-10「:9 光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。:10 兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。」と。同じIヨハネ4:20-21にもこう書いています。「:20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。:21 神を愛する者は、兄弟をも愛するべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」と。これらの箇所が訴えていることは何でしょう。それは皆さん、本当に神様を愛しているのだとしたら、ほかの人を愛さないという選択は不可能だということです。私たちは切り離して考えることがあるかもしれませんが。しかし神様の目で見るとすれば、神様に仕えて、神様の喜ばれることを心から求めていきますと言いながら、周りの人には愛を示したくありませんと言えような、拒めるような信仰者はひとりもないということです。また加えて、この愛というのは私たちが愛しやすい人だけに示すものでもありません。イエス様はここで何とされましたか。あなたの好きな人とも、あなたと考えや気の合う人とも口にされませんでした。何とされましたか。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよと言われていたわけです。

それでは、この隣人とはいったいだれのことを指しているのでしょうか。みことばはそのことも明白に教えてくれていました。イエス様が引用されていたレビ記19章を見てみましょう。引用の元となっていた19:18にはこのように記されてきました。「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは主である。」と。そしてこの続き、19:33-34を見ると、この18節を説明する意味でこのように書かれています。「:33 もしあなたがたの国に、あなたといっしょに在留異国人がいるなら、彼をしいたげてはならない。:34 あなたがたといっしょの在留異国人は、あなたがたにとって、あなたがたの国で生まれたひとりのようにしなければならない。あなたは彼をあなた自身のように愛しなさい。あなたがたもかつてエジプトの地では在留異国人だったからである。わたしはあなたがたの神、【主】である。」と。神様はこの時、民に何を求めていたのでしょうか。それは彼らが自分の国の人々を愛することでした。自分と同じ血筋や背景を持つ人だけではありません。自分と同じように育ってきた親しい人だけではありません。別の国から来た異国人でさえも、要するに見知らぬ人

であろうと関係なく、すべての人を愛するようにと求められていたわけです。彼らの愛というものは、自分たちと違うものに対しては冷たく拒むものではなく、違う者を温かく迎え入れる者でなくてはなりません。どうして彼らはこのような愛を示すことを求められていたのでしょうか。その理由も神様は明白に述べていました。34節で神様は言われています。「あなたがたもかつてエジプトの地では在留異国人だったからである」と。

考えてみてください。かつてのイスラエルのためだけではなく、今の私たちの間にもさまざまな違いはあります。それぞれ育った環境が違うだけではなく、国籍や話す言語も違います。年齢や性別の違い、それぞれが持っている考えや思い、価値観さえも違います。最も身近な人でさえいろいろな点で異なるからこそ、時にはそれが原因となって争いや問題が起こることもあります。親子間や夫婦間、教会にあって相手に対して抱いている自分の期待というものが実際に違っていれば、それが不平不満を生み出すこともあります。私たちの目がその違いに向き始めれば、次第にその人を心から愛することが難しくなることがあるわけです。そんな時、私たちには何がたいせつになるのでしょうか。それはかつての自分の立場を思い出すことでした。神様はイスラエルの民に言われました。あなたがたも以前は、あなたの隣にいる人と同じように在留異国人だったでしょうと。エジプトの地に囚われていたあなたたちは、ただ神様の大きなあわれみと愛を受けて、そこから救い出された、ただそれだけでしょうと。それと同じです。私たちひとりひとりも今自分の隣に座っている人と同じ罪人でした。私たちも自分の罪に囚われていた時、ただ神様の大きな愛を受けて、キリストにあって罪を赦された者にしか過ぎないわけです。そしてそんな私たちが神様がなしてくださったことに感謝して、神様を心から愛そうとするのであれば、私たちは神様に従いたいからこそ、どんな人であろうと愛するようになるわけです。

先ほど私たちが見たIヨハネの中でもこう言われていました。Iヨハネ4:10-11「:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」と。また4:19にもこう書いています。「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」と。神がまず私たちを愛してくださいました。ですから皆さん、私たちは神様を愛そうとします。神様が私たちを心から愛してくださいました。だから私たちは心から神様を愛そうとします。そして神様がほかの人も同じように愛しておられるのであれば、私たちはその人をも同じように愛そうとするわけです。私たちはこの「隣人」ということばを勝手に自分のことばにかえていないでしょうか。この戒めを私たちが読む時に、私たちが勝手に自分の愛したい人や自分に優しくしてくれる人というように変えていないでしょうか。隣にいる人、それが自分の伴侶であるかもしれません。親や子であるかもしれません。職場の人であるかもしれませんし、町で出会う人かもしれません。教会の兄弟姉妹でも同じです。隣にいる人、その人を私たちは神様を心から愛するからこそ、だれにでも喜んで愛を示そうとしているのでしょうか。この愛は単なる感情だけの話でもありません。「隣人をあなた自身のように愛せよ」と引用されたイエス様のことばには、アガペの愛が使われていました。つまりどういうことでしょうか。私たちの愛は単に感情で終わるものではなく、意思をもってその人のために自分を捧げようとするそんな犠牲的な愛のことを指して表しています。

「あなた自身のように」というのも、ほかの人を愛するためにはまず自分を愛さないといけないというようなナンセンスな話ではありません。シンプルに私たちは生まれながらに自分のことを一番に世話し、自分のために最もエネルギーや時間を使ってきました。多くのことを費やして、犠牲にして自分を世話してきたわけですから。私たちが隣人を愛する時には、その人の必要のために、自ら進んで犠牲を払って仕えていくことが求められているということです。確実に言えるのは、もし私たちが神様を心から愛していなければ、隣人を愛することは絶対に無理です。もし私たちの心から神様が忘れられているのであれば、もし私たちの心にプライドがあふれているのであれば、互いの間で愛を実践することなど

できません。神様に対しても同じです。神様がすべて恵みによって与えてくださっているにもかかわらず、私はこれに値しますとか、私はこれが自分で成し遂げましたなどと考えていたら、心から神様を忘れ去られてしまうわけです。だれかを愛する時も同じです。だれかが何かをしてくれませんが、私はそれに値するはずだと。しかし覚えておかないといけないことは、そのすべても神様の恵みでした。私たちに値するのは、たださばきと滅びだったわけです。夫や妻に対しても、親や子に対しても、職場の人に対しても、町で会う人に対しても、すべてのことが恵みによって与えられていると私たちが本当に信じているのであれば、神様を愛するからこそ、その人たちにも同じ愛を実践しようとするわけです。神様をまず心から愛するその愛が、どんな人に対しても愛そうとする愛を生み出します。だからいつも思い出し続けることです。かつて罪に死んでいた自分を、いや今もなお罪と戦い続けているようなそんな自分を、恵みによって救ってくださった神様の愛を思い出し続けることです。すべてが恵みだとすれば、私は愛を示したくありませんなどという、そんなプライドは捨ててしまわないといけないということです。神様を心から愛すること、そして隣人を愛することは、決して決して切り離すことのできないものでした。この中にどちらかだけやっているから大丈夫だという人はいません。もし隣人を愛していないのであれば、それは神様を最も憎んでいるのと同じことだということです。どちらもたいせつな一つの命令でした。聖書の中にあるすべての命令の中で、最も重要な一つの命令は、「これです」とイエス様が言われました。

こうして罫にかけようとした律法学者たちの策略はすべて失敗に終わりました。偉大な主の前に、すべて成功することはありませんでした。そしてこの後、マルコ12:34の最後のところにも書いてありました。「それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者がなかった。」と。イエス様は反論の余地もない完璧な答えをされました。

皆さん、最初にした質問をもう一度考えてみてください。果たして私たちは最もたいせつな一つの命令、戒めに日々どれほど心を留めているのでしょうか。この最も重要な戒め、いや神様に対する感謝の応答は、ひとりひとりの信仰生活において、また同じ神様の愛を知った者の集まる教会において、決して欠かせないものでした。そうであれば皆さん、今週も続けて、神様と隣人を心から愛する者として続けてともに歩んでいきましょう。